

## 税理士 植村祐三

### 私の被爆体験記

今回「知覧・観光大使」に任命された山近義幸氏とご縁が出来たのは、「経営者漁火会」と云う中小企業経営者団体の大阪の月例会に於いて、山近氏のお話を聞かせて頂く機会があった時です。

その際、私が広島県出身だとお話したところ、株式会社ザメディアジョン（代表者…山近義幸氏）の本社（広島市横川町）於いて開催された“感謝祭”にお招きを頂きました。私が被爆した場所は横川町「みささ橋」近くの陸軍練兵場（爆心地より4キロメートル）の近辺だったので、早朝に車で被爆当時の自宅近辺にご案内をして頂きました。

現在、私は74歳ですが、被爆した時は8歳（国民小学校2年生）で、当時、広島市内上空はB29が4機編隊で悠々と飛んでおり、機体に高射砲が命中し、煙を吐きながら編隊から徐々に脱落し、落下する姿を見たとあります。また、“戦艦大和”を生んだ、“呉”の上空では、飛行機目がけ猛烈な高射砲が炸裂しておりました。

原子爆弾投下日は、雲一つない晴天、始業ベルが鳴り全員が教室に入り、私はたまたま便所の一番奥におりましたところ、突然、写真のフラッシュの何千何万倍ものフラッシュを浴びたような「ピシャーッ」という光を浴びて、全身が閃光に包まれ、目の前が真っ白になりました。

アッと思ったのも束の間、ほんのわずかな空白・沈黙の時を経てドーンという異様な轟音とともに、校舎全体が突きあげられたような衝撃が走り、ゴォッ、ガラガラッと耳を覆いたくなるような、建物が崩れ落ちるような凄まじい音が聞こえ、「学校に爆弾が落ちた」と思い、教室にとつて返すと窓ガラスは粉々に砕け散り、机・椅子がひっくり返り、同級生は頭から血を流し、顔中血だらけになって泣き叫んでおり、全てが一瞬の夢の中の出来事のように思えました。

即座に教室を飛び出し、燃え盛る炎を避けながら、空き地伝いに家にたどり着きました。その日の内に、私は知人の家に避難、自宅は類焼をまぬがれましたが、布団を干していた隣家は焼け落ち、その後、台風が往来し、眼前の大田川が氾濫し、自宅の家財はめっちゃめっちゃな状態となりました。

広島市内の山々は何日も燃え続けており、雨上がりの市内から、木材の消し炭を袋に集めて持ち帰って燃料とし、毎日、高粱（コウリヤン）の粉を丸めて団子を入れた「コウリヤン汁」と、小川から獲った「セリ・小魚・イナゴ」入りの味噌汁、大田川では大きな「ハゼ」が釣れました。それらで飢えを凌いでおりましたが、子供心に「コウリヤンの団子汁」は何とうまくないな—と書いたことを未だ忘れられません。

8月6日の原爆投下時、父はたまたま出張中で被爆を免れましたが、翌日からの原爆の後片付けで放射能の影響か、翌年の2月、44歳で早世しました。長男は栄養失調のような姿で戦地から復員、次男と私は何とか元気な状態でしたが、生まれたばかりの弟は、襖の下敷きとなりましたが何の怪我もなく助かりました。

その後、次男を除き家族は両親の故郷である香川県に帰りましたが、母は乳飲み子だった弟を抱え、私を高校へ行かす為に一生懸命に働いた生活の気苦労か、それとも被爆の影響かは解かりませんが、48歳の若さで病死。私は長兄の援助を受け、弟を抱えた新婚ほやほやの家庭を離れ、親族の家を転々としながら奨学資金を受け、お陰さまで商業高校を卒業することが出来ました。

「祐三」と云う私の名前は、天祐（いざと云う時には天が助けてくれる）と云う意味があり、両親の子どもを思う願いを感じざるをえません。

その後、サラリーマン時代を12年間過ごし、34歳で税理士事務所を開業しましたが、体調は芳しくありませんでした。今にして思えば、原爆の影響かどうかは定かではありませんが、10代から20代は体重45キロ、肩こりがひどく、目がかすみ、よく鼻血・血便が出る状態で、21歳頃には極度のノイローゼで生死の境目をさ迷いました。その苦しみの中で、“般若心教”が教える“空・無”と云う心境を無意識に会得したように思います。それは「この世に存在しないが、今、茲に存在している。空無の状態ならば、苦しみは無い筈である。すると努力しようがしまいが、苦痛とは関係ない」と思った時、よし、やってみよう、との心境になり、それから夜型の生活から朝の4時半に起きる生活に切り替え、25歳から夜間の大学で学び始めました。

人間は習慣で90%は動くと言われるので、幾ら好い話を聞き、やる気を一時的に出せても、表層意識での理解はたちまち消え失せてしまう。表層意識を潜在意識化する為には、自然法則に従い、好い習慣を付ける。これが人生を有意義に送る秘訣だと思います。

そして、10年間努力すれば、一定の成果が出ることを体験上確信しました。

また、不摂生がたり、44歳の時、肝臓病となり、4か月入院をし、妻は医師から「緊急事態だから、親族に知らせるように」と云われたそうで、大変心配させましたが、妻は父より常々「大事」があれば十句観音経を唱えよ」と云われていたので、それはもう必死に唱えたそうで、妻には本当に感謝してもしきれない気持ちです。

医師からは「肝臓病は特效薬がないから、仕事は半日程度とし、のんびりすれば生きながらえるだろう」とのご宣託だったので、後は自然の力を頼りとする以外には無いと考へ、三島の沖正弘導師が指導する「沖 ヨガ道場」に出向し、断食の真似ごとなどもし、お陰で肝臓の数値は正常になりました。現在、沖 ヨガの流派の人々は、NPO法人国際総合ヨガ協会“に結集しています。

本年は鹿児島新幹線が開通することもあり、全従業員共々、秋には“知覧・富屋旅館”へ是非立ち寄り、若き英霊に接したいと思っております。

平成23年3月2日